

食、環境、地域への思い熱く

ふーど力 新規就農

農地荒廃が進む中、農外から参入し食を支える新たな担い手たちへの期待が集まる。県内JAで研修した人らでつくる、くまもと新規就農者ネットワーク(事務局・JA熊本中央会・連合会管農生活センター)世話人の森賀広子さん(熊本市)と最近就職した若手3人に、夢と課題を語り合ってもらった。4人は、自然に寄り添う暮らしの良さや、環境保全・地域づくりなどへの熱い思いを消費者と共に有する大切さを指摘した。

(峰松清子) 森賀さん(43) 昨年、消費者の一人としてJAの新規就農研修を受け、農家の大変さ

と食の大切さを実感した。草野英雄さん(34) 和木町、2003年研修) 有機農業

を営む尊敬できる人と会社員時代に出会い、懐かしく豊かな世界と感じ飛び込んだ。年間50種の野菜を有機栽培している。

塩谷先さん(36)阿蘇市、04-05年の研修) 京都出身。大阪の商社を辞め旅行中に阿蘇市で農家民泊。豊かな自然の中で暮らしたいと思い、同

市でトマト作りを始めた。

澤井健太郎さん(30)水俣市、坂田建設食農事業部) 青

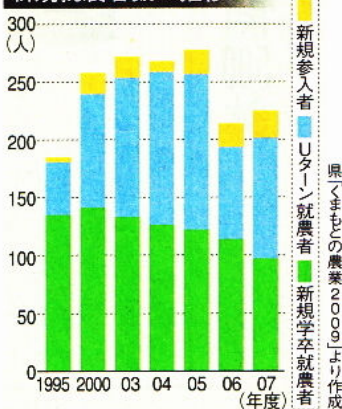
年海外協力隊の農業研修で重宝さを実感したのがきっかけ。循環型農業を目指し2年前、米ぬかや学校給食の残菜などで作った飼料を使い、ゲージを使わない自然に近い育て方で養卵をスタート。鶏ふん

決まる。

澤井 道の駅や自然食品店、レストランに出している。1個50円で一般の卵との価格

差は歴然だが、新聞紙で作ったバッグをパッケージに使い、環境への配慮を伝えている。価格決めの背景を知って

新規就農者数の推移



もらう工夫の一つでもある。森賀 消費者ももっと生産現場を知り、交流したい。塩谷 昔は食べ物を作ることと生活が一体だったが、現在は切り離されている。草野 田畑に足を運んでもらえるよう仕掛けたい。いろいろな形態で農業をやる人が増える。

理解と支援が必要

◇JA熊本中央会・連合会 管農生活センターで就農研修を担当する内田敬介さん 新



規就農の場合、住宅や農地、機械、資金の調達が大きな課題。生活が成り立たず断念する研修受講者も1割いる。新規就農者が独立するには、先達の生産者の力を借りるしかない面が強い。農村・農業を支える新たな市民をばくむ視点から、JAをはじめ地域住民や自治体の積極的な理解と支援が必要だ。

え、地域で自給できるのが理想だ。澤井 消費者には食材を見る目を持ってほしいし、食べ残さないようにしてほしい。生産者同士や異業種連携で価値あるものを生み出し、地域を盛り上げていきたい。◇メモ 昨年、農業に就いた人は全国で6万人。家業を継ぐ人は減少したが、新たに始めた人(1960人)と農業法人に就職した人(8400人)は増えている。

地域レーダー

金丸弘美の

森賀 農作業を体験してみても、作物はそう安く販売できるものではないと感じた。塩谷 JA出荷で、価格は市場の需要と供給で決まる。就農後3年は軌道に乗せるのが大変だが、天候に恵まれ、なんとか安定してきた。もっと栽培技術を磨き、効率的な経営で利益を上げた。

草野 数種類の野菜のセットを、個人と東京のレストランに販売している。1人でやっているだけで、販売量は今の自分の技術でできる生産量次第。どんなお客と付き合うかも農業のやり方や暮らし方も

大学で各地の農業の新しい取り組みを紹介している。最近では環境や食の安全、田舎暮らしに関心が高まり、現場を訪ねる学生も少なくない。彼らが足を運ぶのは積極的な経営や、これまでにない複合的経営から情報発信ができていくところだ。働いてみたいという学生もいる。しかし、新規に就農といっても簡単にはいかない。家業として継ぐ者から法人に就職する者、農地を取得して営む者、研修も独立資金も必要だ。農産物を取売す

注目集める群馬や愛媛の就農

るルートも作らなければ始まった。焼き肉レストランで野菜のサンチュの需要があることを知り、島では栽培されていなかったサンチュの契約栽培を始めた。さらにさまざまな野菜を試験栽培して店に持参し、必要とされる野菜だけを栽培するという野菜作りを始めた。この手法を近辺にも広げ、地域連携につなげている。最初から個人で農業を始め、新しい展開で周囲をおとすと言わせる人もい

る。愛媛県の岩城島で農業をする古川泰弘さんは、5年かけて学び、近郊の農地付きの家を購入して独立する人も生まれている。島名産のレモンの販売を(食環境ジャーナリスト)



農業と食について語る座談会出席者。左から澤井健太郎さん、草野英雄さん、森賀広子さん、塩谷先さん=熊本市の県農協会館